

中国残留日本人孤児から学んだこと(第8回)

寄り道：改定出入国管理法とアメリカのキャラバン

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2019年1月号掲載記事に若干加筆しました。

改定出入国管理法が成立した。「特定技能」という在留資格を新設し、より多くの外国人労働者が働けるようにする法律である。残留孤児問題と一見、無関係のようだが、実は深く関連している。残留孤児の二世・三世の日本での就労実態には、外国人労働者との共通性が多い。残留孤児の二世・三世には、ブラジル日系人と同様、中国日系人として、つまり外国人労働者として来日した人も少なくない。

さて、今回の法改定に野党は反対した。野党いわく、現在、日本で働く外国人(技能実習生など)は劣悪な労働条件で酷使され、人権を侵害されている。今回の法改定は、それらの深刻な問題を放置したまま、外国人労働者を一層幅広く活用しようとするものだ。日本で働くことを希望する外国人をどのように受け入れ、共生社会をどう作っていくかは、将来の日本の国の根幹にかかわる重要問題だ。それなのに安倍政権は、ろくに議論を尽くさないまま、法改定を強行した。これは不当だ。

こうした野党の言い分を、私は一々正しいと思う。

しかしそれでも私は、野党の主張に不満を感じている。

私が不満なのは、野党が「外国人の人権がきちんと守れる制度ができるまで、外国人労働者の受け入れには反対だ」と主張しているように聞こえ、そこに抜き差しならない排外主義を感じ取ってしまうからだ。いいかえれば、「外国人・移民の受け入れを大幅に促進するために、その人権が守れる制度を早急に作ろう」と主張しているように聞こえないのである。

実際、現在の外国人の技能実習や就労は、多くの深刻な人権問題を孕んでいる。それなら野党はなぜ、それらの廃止・縮小を主張してこなかったのか。そして実際に外国人の技能実習や就労を廃止・縮小すれば、一番打撃を受けるのは、来日を切望している外国人自身だ。彼・彼女達は、母国では安定した就労・生活を実現できないからこそ、将来を切り開くために自らの意思で母国を脱出し、来日することを望んでいる。技能実習制度・外国人就労の縮小・廃止は、その脱出の道を閉ざし、将来の展望が見えない母国での苦難に埋没させることだ。「外国人の人権がきちんと守れる制度が(日本に)できるまで、外国人労働者の受け入れには反対」という

主張は事実上、脱出の道を狭める排他的主張のように思えてならないのである。

同じような疑問は、アメリカ中間選挙の際にも感じた。共和党のトランプ政権は、アメリカ国境に迫る移民希望者（キャラバン）に軍隊を差し向け、武力行使も辞さない姿勢を示した。一方、民主党はトランプの強硬姿勢を批判し、移民の人権を守るよう主張した。私はもちろん移民の人権を守るべきだと思う。ただしアメリカがいったんキャラバンを受け入れたら、もっとたくさんの移民希望者が続々と押し寄せてもおかしくない。その時、民主党は事実上、誰でも自由に往来できるように国境を開放する覚悟と決意をもっているのだろうか。もしそうでないなら、そのような腰の定まらない中途半端な主張では、短期的にはともかく、中長期的にトランプ的な愛国主義に勝てるわけがないのではないか。

そして日本では、トランプを批判する人々が、なぜか不思議なことに外国人労働者・移民の受け入れに慎重であり、反対している。「アメリカは移民希望者をまずは柔軟に受け入れ、その後に人権を守れる制度を作るべきだ。しかし、日本は人権を守れる制度をきちんと整えた後でなければ、外国人労働者を受け入れてはいけない」。このような主張は、トランプと安倍の双方を批判しさえすればよいという二重の御都合主義ではなからうか。

移民・外国人労働者は、近代的な国民国家・国民主権の正統性そのものを根底から問い直す歴史的なうねりである。移民・外国人は、国民主権に代わる未来の世界社会秩序・新たな越境的公共圏を創造しようと苦闘・模索している人々だ。彼・彼女達の苦闘や要求に目を閉ざし、「日本国内に面倒な問題が入って来なければよい」と考えるのは、右翼・左翼の違いを問わず、時代遅れの保守的なナショナリズムであろう。

人権はもともといろんな制約を孕んだ概念だが、それを信奉する人々には、国籍や人種・民族を問わず、人が人である限り持つ普遍的な権利とみなされている。一方、国民主権は、国民以外の人々（非国民）を主権から排除する排他的な権利だ。だから人権は、ある国の「国民(nation)」が制度を整えてから「移民」に提供してあげるようなものではないはずだ。国籍を越えて、「民衆(people)」が一緒になって闘い取って行くものだ。マルクスは、移民・外国人労働者の受け入れに様々な口実を設けて反対する左翼を含む国内勢力を厳しく批判した。そして労働者・下層階級が国籍の違いを越えて連帯し、資本主義の搾取に抵抗すべきだと訴えたのである。

私には、マルクスの主張の方が日本の与党や野党のそれより、ずっと人類の未来を見据えているように思えるのだが、皆さんはいかがお考えだろう。